『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』9（2006）：93－113

内モンゴルホルチン地方におけるテンゲル・タヒホ（祭天）儀礼に関する考察
――エルー・ズゥルトに託された願い

サランゴワ

キーワード：テンゲル・タヒホ儀礼、シャマン、祭司、エルー・ズゥルト

はじめに

モンゴル人の宗教信仰を言うといつもチベットから伝わってきた仏教のことを思いつかれるのは一般的である。しかし、本質的に人々の心の奥底に深く潜んでいるのはやはり古代から根強く根を下ろしてきた民間信仰である。近年中国内モンゴルホルチン地方に復活しているテンゲル・タヒホ儀礼はそれの顕著な象徴である。テンゲルとはモンゴル語で天空の意味であり、天神という意味でもある。ここでは天神という意味でのテンゲルを取り上げる。タヒホとは祭祀という意味である。現在ホルチン地方では家単位[1]で、シャマンの祭司のもとで羊を供犠したテンゲル・タヒホ（祭天）儀礼がよく行われている。「テンゲル祭祀はその捧げものによって赤い祭りと白い祭りに区分される」[呼日楽沙　2003：508]。また、呼日楽沙によると、テンゲル祭祀は陰暦の７月祭、ホンダン[2]の雨乞い、豊穣祈願祭、陰暦の 12 月 23 日[3]の祭、正月などに行なわれ、その他には病気や災いを払うため個人的にも行われる。さらには、さまざまな事情でシャマンによって随時テングリを祭る場合がある。また、漢民族の影響を受けて、旧暦の９月９日にテンゲルを祭ることもある。

筆者は 2005 年８、９月（陰暦の７、８月）に出身地の内モンゴルホルチン地方において、シャマンの病気治療儀礼、山羊を供犠したテンゲル・タヒホという名称のもとで行われたテンゲル・タヒホ儀礼をはじめ、祖先祭祀、ロス（水神）祭及び鎮守祭など一連の儀礼に関して現地調査を行った。本論で使われる資料はそのときに得た資料の一部である。陰暦の７月はテンゲル・タヒホ儀礼を行うのに最善の時期だと信仰上ホルチンモンゴル人は考えている。そのため、そのためにシャマンは多忙を極めるが、８月に入ると病気や災いを払う以外には、テンゲル・タヒホを行わないと言う。

テンゲル・タヒホの儀礼の中で、一番大事なのは供犠動物のエルー・ズゥルトである。これは顎、舌、食道、気管、肝臓、心臓、肺臓が繋がったもので、これを一体として取り出しテンゲルと祖先に捧げる。今回の調査でテンゲル・タヒホ儀礼を行ったいくつかの家の人からその動機について訪ねたが次のようにまとめることができる。①恩恵への感謝とこれからの加護を願うこと（幸運、たとえば、農業の収穫、商売の繁盛などに恵まれているので、テンゲルに感謝したい。大病が快癒したので、テンゲルに感謝したい）と、②病気、事故、不作など不幸から逃れたいという祈願にあると考えられている。というものの、エルー・ズゥルトに具体的に通じて何を願っているのか、その心性を探ることを試みる。

---

(1) 家単位の範囲は大体世帯単位。
(2) ホルチン地方のシャマンの一種で、テングリの甥と信仰され、主に祭天儀礼をとり行う。
(3) 当日は火の神を祭る日であるが、それに合わせてテングリを祭る場合もある。

Ⅰ．テンゲル・タヒホ儀礼の過程

実施日：2005年8月26日（陰暦7月23日、午の日）

祭司者：1932年生まれ、シャマン歴40年のベテランシャマンと弟子で、助手である2人のシャマン。ベテランシャマンをここで、老シャマンと称する。

祭主：家の主人のＳ氏、25歳、農民。５歳になる１人娘の父親で、妻と両親と合わせて２世帯、５人家族。

儀礼の内容：祭天、祖先祭祀、鎮守祭、水神祭の儀礼。

今回の儀礼を調査するために、テンゲル・タヒホ儀礼の祭主から連絡を受けて、儀礼を二日後に控えたときに筆者は現地に入った。しかし、予定当日になっても、儀礼を行う気配はなかった。理由を尋ねたところ、「老シャマンは一週間前に他の所に招かれ、テンゲル・タヒホ儀礼を行った。実は、用意された羊は供犠するに小さ過ぎた。供犠にふさわしくないため、老シャマンは守護霊に羊を変えるよう指示された。しかし予定日も迫ってきたので、老シャマンは無理やりに儀礼を実行し、しかもテンゲルに羊に関する情報を粉飾して叙した。そのため、守護霊の怒りを買い、体を痛められている」と祭主に教えられ、儀礼を行う日は遅れることが余儀なくされたことを告げられた。現在のホルチン地方はジャロード・ホショー[1]などの一部を除くとほとんど耕民化され、しかもほとんど機械で農耕を行っている。そのため、それまで役畜として使われていた牛や馬が昔のような役割を果すことは少なくなってきた。にも拘らず、農民モンゴル人は牛や馬、羊を小規模に飼ってきた。いわば半農半牧である。しかし、近年内モンゴルのあちらこちらに広まる砂漠化の影響で、羊を放牧することが禁止された。従って、羊を飼っていた農家はほとんど羊を売り、手放した。テンゲル・タヒホ儀礼を行なった村には一匹の羊もいない。

一週間後老シャマンは100キロ離れた祭主の家に招かれてきた。そこで、また問題が生ずる。テンゲル・タヒホ儀礼に供犠する羊を入手するにかなり苦労した。

テンゲル・タヒホ儀礼は翌日に控えていたので、家の主人は携帯電話で彼方此方に連絡を取り、祭祀にふさわしい羊を探した。そしてやっと30キロ離れた村にいることを知り、祭りの当日の朝、自家の農業用のトラックで買い求めに出かけた。戻ってきたのは朝の七時だった。入手して来たのは２歳の牡山羊だった。現在完全に耕民化した農民が昔のしきたりに沿って伝統行事を行なうためこのような苦労がある。かつては、自家の羊群から大きく最適と思われるものを選び出せたであろう。供犠にする家畜は、２歳以上の牡で、肉つきが良い、病気がない、毛並の良い、毛色に混ざりがない、見た目にきれいなものを選んでいた。今も選ぶ基準は崩れていないが、そのようなものをできるのは低下している。

---

(1) ホショーとは、中国語で旗と書き、中国の行政単位の県に当たる。

テンゲル・タヒホ儀礼を正午までに終わらせねばならないという時間的制約をシャマンに強調されたので、山羊を入手してきた後早速儀礼が本格的に始まる。

今回祭られたテンゲルは人々に豊かさをもたらすビスマン・チャガン・テンゲルである。ビスマン・チャガン・テンゲルとは、「チベット仏教では豊かにする天、つまりナムセライ（チベット仏教の仏の名前—筆者注）のことを指している。テンゲルは、実は北側を守るとされている。シャマンはそれを良い方向である西側のテンゲルとして信仰するのはやはり豊かにする力を借用したからである」［尼瑪　1999：153］。ビスマン・チャガン・テンゲル以外にホルチン地方では、時によってチャヒルガン[1]・テンゲルをも祭る。話によるとこのテンゲルは西北側に住む雷神である。家庭内に喧嘩が絶えずに起こる、中傷される、雷に人や家畜が打たれるという場合に祭る。誹謗中傷された場合、是非を明らかにしてくれることを祈願してチャヒルガン・テンゲルを祭る。これを見るとチャヒルガン・テンゲルは裁判官の神である。また、ホルチン地方のシャマンによれば、ホルモスタ・テンゲルとはテングリの中で地位が最も高い。つまりハガン（皇帝）テンゲルである。宇宙の中でただ一つであって、「テンゲルより高いものはない」と言っているのは、実はホルモスタ・テンゲルを指しているとのことである。この意味で、テンゲルはモンゴル人の信仰の中で究極的な存在である。モンゴル人は16世紀後半から18世紀にかけて仏教に帰依した。にも関わらず、テンゲルはモンゴル人の信仰上で最高神とされる位置は不動である。

1　テンゲル・タヒホ儀礼

1）準備：穴・清め・祭壇・献辞

穴を掘る

早朝6時ごろ、まず庭の西南方向に供犠山羊の胃と腸の内容物やそれを洗った水、それに骨、足を入れる深さ1m、直径70cmの穴を掘る。

清め

祭壇に祭具を配列し始める前に、老シャマンが線香で供犠山羊と祭壇、及び周囲を清める。

祭壇の設置と祭具の陳列

①その時間に、女性の助手シャマンと家の主人の妻、そして手伝いにやってきた親戚の女性たちが、祭壇を設ける。祭壇はこの家の食卓である丸テーブルである。家屋の西南方の所で、西南方向に向けられて設ける。まずアマン・チャガン・ハダグ[2]を祭壇の両端に載せる。真ん中に9つの盃を並べ、燗をつけた酒を満々と注ぎ、火を点す[1]。ホルチンモンゴル人は、酒を熱燗にして飲

---

(1)　チャヒルガンとはモンゴル語で、電気や稲妻のことを意味する。ここでは、稲妻の意味から発生している。

(2)　アマン・チャガン・ハダグとはホルチン地方で、3分の1メートル、あるは3分の2メートルの大きさの白い綿の布ででき、聖潔な心と物の象徴で、礼品として使われる。

(1)　市販の酒のアルコール度は大体30から55度で、それを儀礼や年中行事に当たっては盃に注ぎ、点火して捧げる。燃える時間は酒のアルコール度によるが、大体10分から20分である。

む。ここで、テンゲルが祭壇に降臨してきて飲むように用意されている。

②玉蜀黍をたっぷり盛った器に線香を９本たく。

③市販のサラダ油を注ぎ満たされたみあかしを点す。昔ならば、自家製のバターだったが、農耕を営むようになってから、手作りのバターを作れる農家が少なくなってきている。ここで強調しておきたいのは、祭具として使われる盃は必ず色と模様と大きさがまったく同様で、罅があるのを絶対に使わない。それはテンゲルに対する敬虔な心を表している。一方、モンゴル人は、日常生活において罅が入った食器などをなるべく使わないようにする。罅が入った食器などはある種の古き、弱き生命の象徴で、縁起が悪く、不吉だと考えている。モンゴルのシャマニズムの信仰では、数字の９は吉数である。最高、神聖で、完璧、円満などのめでたい意味を表してきた。ここで、シャマンは具体的にどう考えているかを知るため、なぜ９本の線香、９個の盃かと老シャマンに尋ねたところ次のように説明してくれた。「9 個の盃は 99 (2) のテンゲルを象徴している。また、テンゲルに対する信仰心の深さと敬虔さを意味している。9 本の線香は９つの方向の主(神) (3) を象徴している」。『元朝秘史』に出てくる 9 本足の白い旗について、「9 本足と言うのは、４万兵士の支えである４本の黒い旗と同じように、90 万民衆或いは 9 人の将軍、または 9 という数字と何らかの関連性があるだろう」［胡日査巴特爾　1991：60］と考えられている。

献辞

祭壇を陳列している間に老シャマンは左手で盃を持ち、右手のアマン・チャガン・ハダグで聖酒に浸し、東南から東北方向にかけて振り撒きながら何かを囁く。その動機と意味を尋ねたところ「守護霊と補助霊 (5) に、Ｓ氏に招かれてテンゲル・タヒホ儀礼の祭司役を務めようとしていることを叙し、その超自然の聖なる加護を祈願した」と回答してくれた。一方、二人の助手シャマンにはこうした動きは見られない。西南方向に向って祭壇が設けられ、テンゲルに叙するときは、西南方向に向って行われるが、老シャマンが自分の助けとなる守護霊や補助霊を拝み、事情を叙し、加護を求めたときは、東南から東北方向に向かって行われる。老シャマンの話によると、これら超自然の精霊たちは東北方向に住んでいるという。また、老シャマンは精霊たちを祭るときはいつも夕方から東北方向に向かって行うと語った。ここで、老シャマンの補助霊には動物の精霊や、伝説上の人もいる。その住家は東北方向に位置しているという。

また、ホルチン地方のシャマンは病気治療などの場合において師匠 (1) で、守護霊の降臨を求めて

---

(2) モンゴルのシャマニズムの信仰では、**99** のテンゲルがあると考えている。

(3) ここで言っている９つの方向の主とは、地神・水神の龍・山神・火神・財神・牛神・虫神・草神・田神という。これらに関しては今後調べて行きたい。

(5) 守護霊とはここで、老シャマンをシャマンにさせた亡くなった前代シャマンのことを指し、補助霊とは、シャマンの病気治療など諸儀礼に助けとなる精霊のことを指している。

(1) ホルチン地方では、前代シャマンをゴール・シュトゲン（軸なる精霊）、シュトゲン・バッシ（師匠）という。ここで、前代シャマンが夢や直接に感じさせる方法で色々な技法を教えるため、シャマンにとっては師匠である。

葬られた場所から招き呼ぶのがほとんどであるが、ここで、老シャマンは守護霊をも東北の方向に住んでいると語っている。それは、守護霊と補助霊の集める場所は東北の方向にあるという。テンゲルを祭る方向と助けとなる精霊を祭る方向は丁度逆である。

竈を設ける

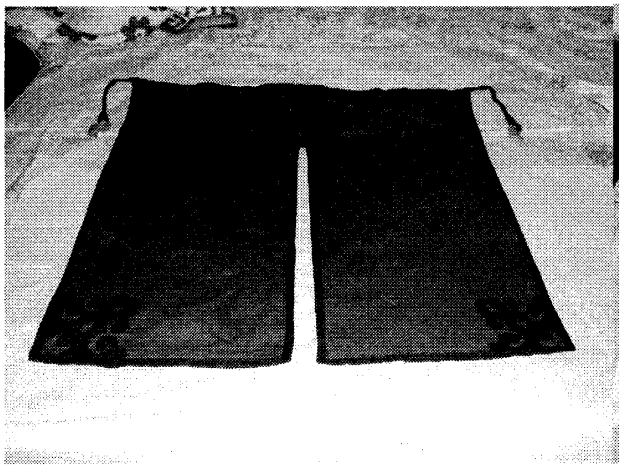
家の主人の父親が家屋の左側に供犠肉を煮る臨時の竈を作る。

清め

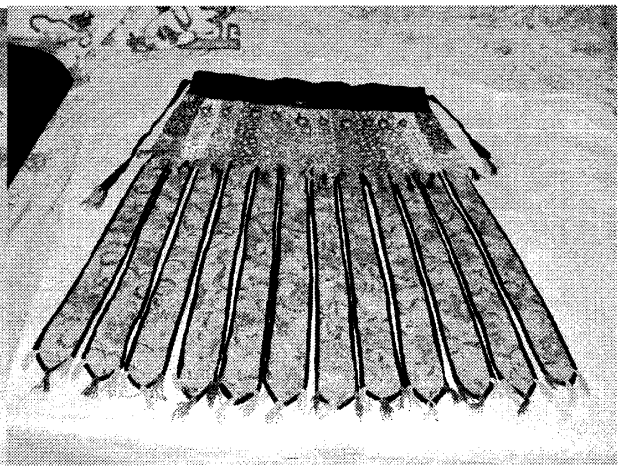
祭壇に祭具を配列し終えた後、老シャマンは線香で祭壇やその周囲をもう一回念入りに清める。

敷物

西南方向に向けて設けた祭壇のそばに敷布団と座布団を敷いておく。



シャマンがビスマン・チャガン・テンゲルを祭るときにつけた赤いエプロン。



シャマンの神服。この神服はテンゲルを祭る儀礼以外、あらゆる儀礼に着られる。

2）山羊の供犠

山羊の供犠は(1)生きた山羊をテンゲルに捧げる、(2)解体、(3)山羊肉の復元と供犠の 3 段階からなる。

(1)生きた山羊をテンゲルに捧げる

儀礼は朝の 7 時半から本格的にスタートした。まず、老シャマンは西南方向に向って右手のアマン・チャガン・ハダグを、左手に持っている聖酒に浸し、振り撒きながら、第三者の立場からテンゲルに以下の内容を叙する。「乙酉年の 7 月 23 日（旧暦）、午の日に、この家の主人のＳ氏がビスマン・チャガン・テンゲルを祭ろうと 3 年間ずっと思ってきた願いを実行している。テンゲルの恩恵に感謝し、これからは生活がもっと豊かになり、一家老少がいつも健康で平安に暮らせることを願っている」と述べる。その時男性の助手シャマンは老シャマンの隣に立って両手を合わせて黙祷する。老シャマンの声はこれより前、自分の守護霊と補助霊に叙したときより少し高めで、そばにいた筆者に内容が

はっきりと聞こえる。続いて、老シャマンと2人の助手シャマンが赤いエプロンを巻き、太鼓を持って敷き布団に跪く。家の主人はシャマンの隣に跪き、左手に盃を持ち、右手にアマン・チャガン・ハダグを持つ。主人の背後に酒を注ぎ足す役の男性が立つ。その周りに家族、親戚および村人合わせて50余りの人が見物する。

シャマンはビスマン・チャガン・テンゲルに改めて家の主人に頼まれてテンゲルを祭っていることについて、祈祷文を唱えて報告する。

軸がある祭壇を設けて、
線香を捧げている。
この家の主人は
両手をついて跪き、
アマン・チャガン・ハダグをもって
酒をまっすぐ散らし飛ばしている。
ビスマン・チャガン・テンゲル、加護してください。
この家の主人、
膝を折って跪いている。

足がある祭壇を設けて、
線香とみあかしを捧げている。
この家の主人は真心を込めて、
慈悲深くビスマン・チャガン・テンゲルを祭っている。
三年間強く望んできた願望を実現すると言い、
本日、良きなる年の良きなる月の良きなる日に、
柄がある服(1)を着た弟子(2)たち我々は、
父上師匠(3)の教えに従い、
この家の主人は、
祭りの慣わしにそって行なうよう私達に頼んだ。
そのため、今捧げている。
父なるテンゲル(1)、加護してください。

続いて、山羊を入手した経路を叙した。

---

(1) シャマン服のことを言っている。
(2) 年の如何を関わらず、シャマンは自分のことを守護霊の弟子とよく言う。
(3) 先祖シャマン、つまり自分の守護霊のことを言っている。
(1) モンゴル人は天をアブ・テンゲル、エチグ・テンゲル、つまり父なるテンゲルという。これに対して、地をエヘガシャル、つまり母なる大地という。アブは父という意味で、エチグはアブの尊敬語である。

ジャ[2]、
家の主人は
羊を飼っていないけれども、
人から入手した。
金を出して買ったのだ。
恩恵深き父なるテンゲル
家の主人の供犠山羊に
情けをかけてください。

次に、山羊を褒め称える。これによってテンゲルを喜ばせることを願っている。

ジャ、
千頭の羊の中で、きれいな尾をもった山羊だ。
牛でもなければ、羊でもない、山羊である。
病気などはない山羊である。
ジャ、
千頭の羊の群れの先頭を走る山羊を選んだ。
清泉の水を飲ませた。
栄養ある草を食わせた。

風に吹かれる毛が美しい。
頭は鋼鉄のように硬き、
鋼鉄のような硬い2本の角が有り、
音を聴くには2つの鋭い耳が有り、
遠くの音を聞くのはこの2つの耳だ。
・　・・・

このように山羊の姿から体の各部位（器官）を1つ残さず順次丁寧に褒め称える。供犠山羊をテンゲルに褒め称えながら叙するとき、体のどこかの部位を叙するのを忘れた場合、もどってきて忘れた部位から唱え直す。祈祷文は老シャマンが太鼓をたたきながら唱え、2人の弟子が唱和する。生きたままの山羊をテンゲルに叙し終わると集まってきた村の人々は祭壇の前で西南方向に向かってテンゲルに3回額ずく。

続いて、老シャマンは山羊を祭壇の脇に西南方向に向けて横にさせ、跪きながら酒をふきかける。山羊が大人しくなった後、老シャマン、助手シャマン、そして家の主人が山羊の後ろに跪き、3回両

(2) 敬意の表現。

手を合わせて額ずく。これは供犠山羊をテンゲルが受け取ることを祈願している。

(2)屠殺・解体・調理

屠殺

屠殺・解体作業は屠手（施術者）1人と3人の助手によって行われた。施術者は腹部をナイフで拳が入る大きさに切開し、右手を穴に入れて心臓付近の動脈を切断する。エルー・ズゥルトを取り出すのは極めて難しい解体作業である。当屠手はこの村に住む40歳の農民で、この周辺で儀礼用の屠殺・解体作業を担当している。

解体—エルー・ズゥルトの摘出

供犠山羊の解体の仕方は通常と異なっている。解体のすべてのプロセスの中で、一番大事なのはエルー・ズゥルトを摘出することである。ここでまず、ズゥルトについて説明する。ズゥルトとは「家畜の腹を割って屠殺して、胸を開けて頭、顎、食道及び肝臓、心臓、肺臓などを繋がったまま取り出して祭祀で捧げるものを指す」[胡日査巴特爾　1992：17]。しかしながら、ズゥルトにも色々なバリエーションが見られる。ホルチン地方では、解体するとき、顎、舌、食道、器官、心臓、肝臓を繋がったままに取り出す。これを一般的に「エルー・ズゥルト」[胡日査巴特爾　1992：18] と言うが、ホルチン地方ではズゥルトと言っている。エルーとは顎の意味である。また、「頭、顎、なしで舌、食道及び肝臓、心臓、肺臓の繋がったままのものをヘル・ズゥルトという。これはエブェンキー族が狩猟を行うときに捧げる」[胡日査巴特爾　1992：18]。ヘルとは舌の意味である。

①供犠山羊が絶命した後、施術者はまず小刀と拳を使って皮を丸剥ぎにする。

②胸を開いて、胃袋、大腸、小腸、脾臓、腎臓を取出す。③オブチューと呼ばれる胸の部分を取り出す。④エルー・ズゥルト（顎、舌、食道、気管、肝臓、心臓、肺臓が繋がったまま）を取り出す。⑤頭、肋骨、頚椎、四肢を切り取る。②を1つの容器に、③、④、⑤（言わば良い肉）を別の容器に入れる。

調理

解体や胸腔内の臓器を洗浄した後、早速水煮に移る。2つの容器に入れた肉を別々の鍋に分けて、味付け[1]一切なしで水煮する。塩というのはこの世の人間の食べ物で、超自然の神の世界に存在するテンゲルの食べ物ではないからと老シャマンが説明した。

解体から水煮まで女性は参加しなかった。通常は女性も積極的に参加するが、病気治療儀礼、祭司儀礼では女性の参加を排除している。

(3)供犠山羊の復元

---

[1] ホルチンモンゴル人は日常肉を調理するには、塩はもちろん、醤油、酢、葱、胡椒で味付けをする。

①祭壇の上に大鍋の蓋を逆さまに置き、その上に煮あがった山羊の大腸、小腸と胃袋を除くほかの部位、つまり良いところだけを元の姿に置く。大腸、小腸と胃袋は別の鍋に入れて祭壇のそばに用意された椅子に載せる。大鍋の蓋の上に載せるのは、肉から肉汁などが流出して地面にこぼすことを防ぐためである。肉汁が地面にこぼし落ちることはテンゲルに対する不忠な行為になるためである。そして、テンゲルが降臨して食べるように、復元された羊肉の真上にナイフを挿し込んで置く。

②生の血を一個の盃に注いで祭壇の端に置く。

山羊の糞をもビニール袋に何個か入れて口を開けて同じく祭壇の端の所に置く。これは供犠山羊を丸ごとにテンゲルに捧げているという心である。

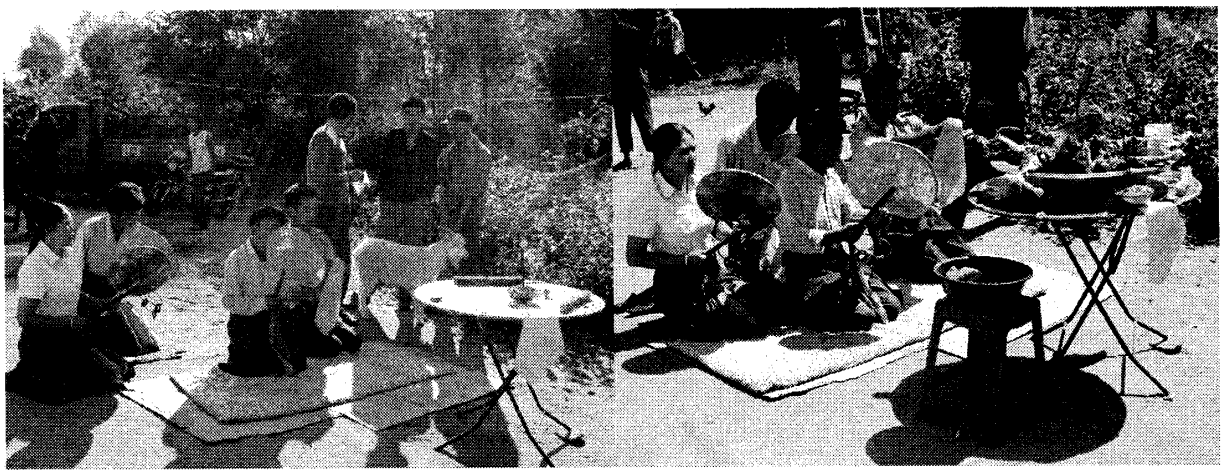
③茶碗１つの肉汁をも祭壇の端の所に載せる。そして、家の主人は跪き、酒をアマン・ハダグでつけてテンゲルへ振り飛ばす。老シャマンは２人の助手シャマンの手伝いのもとで、煮上がった肉をテンゲルに褒め称えて叙する。

軸がある祭壇を新たに設けた。
聖なるみあかしを点した。
供犠山羊の肉を茹であげた。
軸がある祭壇に載せた。
家の主人は跪いて、
上物を捧げている。
シャマン服を着た我々弟子たちは、
テンゲルにこれを叙している。

足がついた祭壇を改めて設けた。
改めて線香をたいた。
慈愛深き父なるテンゲルに、
シャマン服を着た我々弟子たちは、
真心を捧げている。
この家の主人は、
聖酒を父なるテンゲルに捧げている。
真っ白なアマン・チャガン・ハダグで絶えずに振り飛ばしている。
肉を試食してください。
供犠山羊を丸ごとにきちんと茹でた。
生煮えではないことを、

守護霊の弟子[1]である我々は叙している。

老シャマンは煮た供犠肉がきちんと熟成していることを強調してテンゲルに叙する。生きたままの場合は山羊の各部位を詳細に叙することに対して、煮上がったときの献辞は簡単である。生煮えではないということに重点をおく。その中に、テンゲルへの忠誠、崇拝度の深さと強さを改めてテンゲルに伝えている。また、血と糞を特に取り上げて叙しないが、それを欠かすとテンゲルへの不忠誠に繋がると考えている。供犠山羊を完全無欠で丸ごとにテンゲルに捧げているということである。それによって、テンゲルから願いのままの恵みを得ることを祈願している。



生きた山羊についてテンゲルに叙している。　　煮上げた供犠肉についてテンゲルに叙している。

3) エルー・ズゥルトの食道を噛み切る

続いて、老シャマンは立ち上がって、エルー・ズゥルトを両手で持ち上げ、西南方向の宙へ向って、テンゲルに改めてこの家の主人の誠意を叙し、加護を祈願する。そして跪いている家の主人の前にエルー・ズゥルトを持ったまま

「マハン・ド・ドォロタイ・ヨ（肉は好きですか）」

家の主人は照れ気味で微笑みながら「ドラタイ（好きです）」と答える。

老シャマン「マルダン・ドロタイ・ヨ（家畜を可愛がりますか）」と聴く。

家の主人「ドロタイ（はい）」

老シャマン「ウゲホンド・ドロタイ・ヨ（脂肪[2]は好きですか）」

家の主人「ドロタイ（好きです）」と爽快に答える。そして、老シャマンは「これは父なるテンゲルからのヘシグ（授かり物・恩恵）です」と言い、食道を噛みきるよう指示する。指示を受けて主人は一気に噛み切る。するとシャマンは満足した様子で「裕福になれ」と祝福する。

---

(1) ここで、既に亡くなっている師匠シャマン、つまり今の守護霊のことを言っている。

(2) モンゴル人の考えでは、脂肪と油は裕福と繁栄の象徴の一種。

この行為から見ると、テンゲルに捧げたエルー・ズゥルトをまず神であるテンゲルが味わう。そしてそこにテンゲルの恵み、つまり授けてくれた福が潜在している。噛み切られる前のエルー・ズゥルトは神であるテンゲルのものである。口で噛み切る行為はその福を受け取っていることになる。繋がったままの状態で取り出され、儀礼に使われるズゥルトの象徴的意味では「動物の魂が存在する最も重要な部分であり、殺害にともなう再生の祈りが託されている部分なのである」[小長谷　1991:321]。ここで、このエルー・ズゥルトは再生され、しかも大いに増えることによって、代々子孫が豊かになることを意味している。かつて遊牧民だった農民たちは現実の世界で農耕の収穫、家の繁栄することを願っている。祭主はエルー・ズゥルトを噛み切り、テンゲルからの恵みを受けるという象徴的な行為をもって、テンゲル・タヒホ儀礼は、聖なる時間がピークを迎えたことが宣言される。エルー・ズゥルトのもつ意味は後の考察の中で詳細に論じたい。

話によると、1 回で食道を噛み切るのは一番に良いことで、2 回で噛み切るのは二番目に良いという。続いて、老シャマンは祭壇から肉汁と血を取り、家の東南方向、井戸の近くに行ってそれを宙に向けて振り飛ばす。その理由を尋ねたところ「白雪山に住むホブグタイ・ブォー[1]と守護霊への給養[2]です」と語った。

ここまできて、時計は 11 時を回り、テンゲル・タヒホ儀礼は一応終了する。儀礼は予定通り正午前に終えたことになる。

II　心臓と胸肉を祖先に捧げる（祖先供養）

家の主人がテンゲルからの恩恵を受けた後、饗宴するために、供犠山羊の肉は調理の段階に移る。山羊肉を祭壇から降ろすときに老シャマンと若いシャマンは「ジェ、ジェ」と言いながら3回持ち上げ3回戻す。それは、テンゲルの聖なる力が入っている供犠肉に対する敬意である。そして、老シャマンはオブチュー（胸肉）とジルヘ（心臓）を取り、家屋の一番西の部屋に持ちこむ。井に、まずオブチューを仰向きに載せ、その上にジルヘを載せ、祖先神が降臨して食べるようナイフを心臓に差しこみ、窓の所に設けた神棚に置く。神棚には予め線香を3本たき、みあかし、それに3個の盃に酒を注ぎ、点火する。また、老シャマンの神具（神偶・鞭など）が専用の黒い鞄に入れたままの状態で神棚に載せられる。ここからの時間は先祖供養の聖なる時間である。

家屋の一番西の所に祭壇を設ける習慣については、1910年代の文献記録にも出てくる。「新年の仏（仏教の仏―筆者注）供養は29日（旧暦の12月29日―筆者注）に行う。祭壇を花で飾り、小麦粉で作

---

(1) ホブグタイとはホルチン地方のシャマンの元祖と信仰されているシャマンの名前。ブォとはモンゴル語でシャマンという意味。

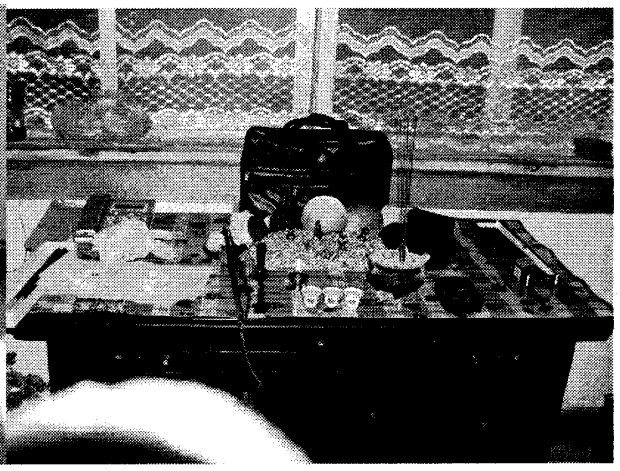
(2) ここで荻原眞子氏の「「シベリアにおける狩猟儀礼と動物供犠」序論」という論文に「飲食物を与える sacrifice を便宜的に給養とする」[荻原　2002：76] とあり、これに依る。

った色々な菓子、それに梨や棗など合わせて9種類の供物を供える。最初に家屋の西側に先祖神や仏を祭る」(羅朴桑殼丹　1981：76)。普段この家では神棚を設けないが、仏壇があり、一番東の部屋に設けられている。最近、ホルチン地方で、仏壇を設けることが増えているが、置場は様々である。今回の儀礼で、一番西の部屋に神棚を設けたのはシャマンが昔からの習慣に従っていることである。

テンゲルは天上界の明るい神の世界に住む。それに対して、祖先はあの世、つまり暗闇の世界に住んでいる。この世とあの世の時間は逆になっていると考えている。1日24時間の正午から午前零時まではあの世の昼である。とは言え、基本的にあの世は常に暗闇であると考えられている。そうするとなぜ、あの世の午前と午後を区別するかというと、あの世の昼になると、精霊は起きて活動する。そのため、シャマンが守護霊、補助霊を供犠する儀礼を行うときはいつも夕方から始まる。

光の世界に住むテンゲルを祭るにはあの世の昼と重ならないようにと工夫されている。一方これは、モンゴル人の考えでは、テンゲルは最高の神で、祖先神を含めた超自然の精霊たちはその下にあるということが明らかである。また、現実の世界で、日の出から正午は日の昇る時間である。そして正午には日昇が頂点に達し、それ以降徐々に降りるのである。日の上昇する時間は繁栄、繁盛などを象徴するめでたい時間だと考えられている。たとえば、ホルチン地方では、太陽、月、星に拝む習慣があり、「太陽と月が昇っているときに限って拝む」[呼日樂巴特爾・烏仁其木格　1988：270]。

胸肉、心臓を祖先に供する。



ゲル・イン・エジレブリ、シャマンの守護霊・補助霊への給養

ホルチンモンゴル人は一般的に、乳製品、サラダや漬物以外、食物を冷たいままで食べない。食べると体に良くない、或いは腹をこわすという。しかし供犠肉であるタヒラガイン・ヘシグ（祭りの恩恵、つまりテンゲルの恩恵）は冷たいままで食べてもお腹をこわさない。また、肉を食べてからすぐ冷たい水を飲んでも平気だとシャマンは語った。ここで言っているのはもちろん調理していない肉についてである。それは、超自然の天の神や祖先霊、シャマンの助けとなる諸霊が味わい、聖なる力が入っているので、普通の肉と質的に異なると信じているからである。これと似た例を挙げると、日本

の田島（福島県―筆者注）地園祭のときに「神輿はわっしょいともむことはなく、静かに進む。道筋の人々は賽銭を上げてこれを拝み、お札をもらうことになっているが、今はそれほど多くはない。堂屋で用意した保露花という紙の造花は、家の軒にさして魔除けにする。あるいは、飲むと薬になるといって、争って奪い取られる」[柳川　1987：100]。造花が薬になることもやはり神の聖なる力が入っていると信じているからである。なお、供犠肉はテンゲル、及び祖先が降臨して味わったので、肉の匂いが薄いと言われている。

Ⅲ　饗宴：タヒラガイン・ヘシグ・フルテホ（テングリの恵み）

出来上がった肉について叙し終ると、祭壇に並べられている肉を自由に調理して集まってきた村の人々にご馳走[1]する。このご馳走をタヒルガイン・ヘシグ（祭りの恩恵）、或いはタヒルガイン・ボダー（祭りのご馳走）と言い、祭り（テンゲル）の恵みを食べるという意味である。そのご馳走にテンゲルの聖なる力が入っており、それを食べることで福を頂くという意味合いが含まれている。祭司役を務めた老シャマン及び2人の弟子シャマンは一番尊敬される身分で、上座に招かれ、家の主人に注がれた敬酒を受けた。集まってきた村人の顔が明るくて、幸せな表情を浮ばせる。饗宴の時間もまた、家族、親族及び共同体の絆を強める絶好な機会である。午後2時になると饗宴はほとんど終った。饗宴もまたテンゲルと祖先との共食でもある。集まってきた村民たちも家に帰り、老シャマンも弟子の家に帰り休憩を取る。

Ⅳ．ゲルイン・エジレブリ・バヤスガホ（鎮守祭）

ホルチン地方には、オール・オス・ネ・エジド（山や地方の主＝鎮守神）、ゲルイン・エジレブリ（家の主＝鎮守神）という。モンゴル語で、エジンは、主や鎮守神の意味の単数形である。エジドとは複数形であり、エジレブリとは鎮めているという意味の名詞である。バヤスガホとは直訳すれば「喜ばせる」という意味である。また、ノトゲィ・バヤスハホとも一般的に言う。nutug とは住処、地方、故郷、住んでいる土地などの意、i は日本語で「を」、話し言葉でノトゲィ、つまり地方や家の神をという意味である。

エジン、エジド、エジレブリの代わりにまた同じ意味で、サヒゴソ、あるいはサヒゴロソンという人格化され、守るという意味合いが強い語をもホルチンで使われる。サヒゴソについて、新疆ウイグル自治区に住むオイラトモンゴル人の習俗では、「サヒゴソとは、家を鎮め、鎮守しているのでサヒゴソという。家ごとに先祖から受け継がれてきたひとサヒゴソがある。その家が他のサヒゴソに変え

---

[1] 肉をさばく家は山羊肉と野菜の炒め料理をした。たとえば、ピーマンと肉を炒め、インゲン豆と肉の炒め、茄子と肉の炒め料理を作った。夏のモンゴル人の庭にも色々な種類の野菜が収穫されるからである。

て祭ることはまずない。どこかへ転居しても昔から祭ってきたそのサヒゴソをまつる」(ムンゲバヤル　1992：72)。このサヒゴソは、マルコ・ポーロの言うナチガイ神で、愛宕が注釈して「テンゲルが天神であり福神が地祇である。したがって natigai 神は福神の一であろう」[マルコ　2000：217、224] と考えている。愛宕が natigai 神を明確に指摘しなかったが、家を守護する屋敷神ことサヒゴソ、エジン、イジレブリを意味している。仏教の影響で、言葉上鎮守神という意味のエジンやエジレブリのかわりにチベット語のナブダグ・シャブダグという言葉を並行して使われるようになったが[1]、神そのものの本質は変わっていない。ホルチンモンゴル人は羊、牛、豚などの家畜を屠殺して食べる前に「胸肉（はじめの一切れ—筆者注）を必ず仏、鎮守神、先祖のためと、屋上へ投げ飛ばす」[呼日樂巴特・烏仁其木格　1998：36]。これは日常生活における鎮守神に対する給養を述べている。これ以外、このようにテンゲル・タヒホ儀礼を行った特別なゲル・イン・エジレブリを祭る場合もある。「昔は、村単位で、オボー[2]祭りを行い、村のナブダグ・シャブダグを喜ばせていた。これは村の最も重要な習俗だった」[ジョリグト　2003：415]。

1）神棚の陳列・シャマンの正装

①夜８時から家屋の一番西の部屋の神棚に祖先供養のため載せられていた胸肉と心臓をとり下げ、代わりに鎮守神を給養するための、手作りのチーズ、ホーレ・ボダー[3]を載せる。

②黒い鞄に入れたままだった老シャマンの神具を取り出し、玉蜀黍の中に並べておく。
引き続き線香をたき、みあかしと酒に火を点す。

③3 人のシャマンは赤いエプロンを巻き、その上から神服を着る。シャマンの神服を着けるのはこれが初めてである。

2）鎮守神祭祀儀礼の始まり

①家の外で家の主人が家へ向って跪き、酒をアマン・チャガン・ハダグで振り散らす。

②老シャマンと２人の助手シャマンも家に向って太鼓をたたき、老シャマンは祈祷文を唱え、２人の助手シャマンが唱和する。

ジャ、

3 軒屋の主人は、

---

(1) つまり、オール・オス・ネ・ナブダグ・シャブダグ、或いはアイル・ゲルイン・ナブダグ・シャブダグ（家の鎮守神）という。

(2) 呼日勒沙編集の『科爾沁民俗文化研究』の第 10 章の内容で、ジョリグトが執筆している。

(3) イネ科の一年生作物。籾は粟より少し大きい。黄色。モンゴル伝統的な食べ物。籾をモンゴル・アム（食べ物の意）という。籾を蒸した後、砂と煎る。そして碾き臼や機械で籾殻を取る。それを一般的にホーレ・バダーという。また、地方によって、モンゴル・アムという所もある。牛乳やヨーグルト、バターと混ぜて食べる。

食べ物の上品を、酒の上品を

差し上げている。

ジャ、

注意深く加護してください。

斑点の母牛の乳で、

清めてから作ったチーズとバターである。

いつも加護してくれている家の神に捧げている。

この家の主人は跪いた。・・・・

この祈祷が唱えられて鎮守祭は終了する。

V．ロス・バヤスガホ（水神祭）

ロスとは龍を意味する言葉で、ホルチン地方では、水神や地神などを意味している。ホルチン地方では、「ロスはテンゲルに命じられて雨を降らせている」、「今年の龍は何匹だ」(1) とかとよく言う。ここでは、家の水神として考えている。老シャマンは家屋から 6mぐらい離れている井戸 (2) のところに行ってロス（龍）を喜ばせる儀礼を行った。まず、煎り米とチーズの上にバターを塗って井戸のそばに載せる。そしてシャマンは祈祷文を唱える。

ジャ、

我が家の柄がある偉大なるロスは

泉の清らかな水を飲み、

人と家畜もこの清らかな水を飲んでいる。

病気にはならないように、

人と家畜が安全であるように、

農作が収穫できるように、

偉大なる救い主であるロスに、

食べ物の初物を

酒の上品を捧げている。

注意深く加護してください・・・・

このように、家の水神を祭り、加護を祈願している。

鎮守神、水神祭りで供されるのは、山羊肉ではなく、乳製品がメインである。

---

(1) ホルチン地方では、正月一日を含め、何日目に辰日ならば、その年にその日と同じ数の龍があるという言いまわしがある。たとえば、正月一日が辰日ならば、その年の龍は一匹あって、正月六日に辰日ならば、その年に六匹の龍があるという。多ければ多いほど雨が多い年になると言われるが、二匹や三匹の場合、互いに非協力的ため、逆に雨が少ない年になりやすいと言われる。

(2) 井戸と言っても手押しのエアポンプである。

VI. シャマンの守護霊、補助霊

一連の儀礼を終えた後、3人のシャマンは各々の守護霊や補助霊を招き呼び、この一家を加護してくれるよう頼む。まず、シャマンの守護霊や補助霊が入りやすくするため、家のドアを全て開けておく。そして、シャマンがドアへ向かって祈祷文を唱え、各々の守護霊と補助霊を招き呼ぶ。約15分後男の弟子シャマンの守護霊が降りてきてシャマンに憑く。その時、男のシャマンは自分の意識を失い、守護霊の容器となった。守護霊が憑いた途端、シャマンは床に座り、右手の掌で太鼓の面を何回も速く叩く。その時、家の主人はシャマンに向かって跪き、酒を太鼓に載せる。その後、シャマンは声を震わせながら歌を歌いながら薬指で太鼓に上から下へとタルニ（呪文）を書く。しかしその意味はシャマンを含めて解ける人がいなかった。10分後、シャマンは急に後ろ向きに倒れ、体を強く震わせた後静かになり、意識を取り戻す。そして起き上がって太鼓を執る。

続いて老シャマンは太鼓をたたきながら守護霊を招き呼ぶ。10分ほど祈祷文を唱えているうちに、老シャマンの様子が変わり、頭を耐えず振りながら太鼓を速く叩く。そうしているうちにオンドルに飛びあがって座る。家の主人は跪きながら酒をあげる。シャマンは一気に飲み干す。続いてタバコをあげる。シャマンはタバコの火がついている部分を口の中に入れて吸う。後に理由を尋ねると「それは、精霊の世界はこの世と逆だからだ」と説明してくれた。タバコをあげたあと、一家揃ってシャマンに跪く。そして、そのまま助言を聴いた。「今日は祭天儀礼をはじめ一連の儀礼を行ったよね。良いことですよ。これからも家族全員が仲良く、親を尊敬し、子供を可愛がりなさい。豊かになる第一の用件は勤勉さにある。常に勤勉で、まじめに頑張ってください。そうすることで代々豊かになっていく。頑張れますか」と家の主人に聞く。「頑張ります」と家の主人は自信満々に答える。家の主人は風引きやすい娘のことが気になりシャマンに「どうすれば丈夫に育てられますか」と尋ねる。「大丈夫だよ。病気ではないので、ただ前々から残ってきた熱がたまっているだけ。明日サイガ[1]をあげる」と回答する。このように、シャマンは家の主人に色々な助言を与える。1時間半後、シャマンの守護霊が去っていき、老シャマンは自分の意識に戻る。ここまで来て、一日の一連の儀礼が全て終了し、非日常の聖なる時間から日常の俗なることに戻る。家の主人をはじめ、集まった人々の顔にほっとした表情があふれる。そして、シャマンたちに茶や菓子で接待してお礼の言葉を言う。

---

(1) サイガとはシャマンの患者に与える「薬」で、守護霊や補助霊の聖なる力が入った菓子や薬草などである。シャマンによってバリエーションが色々ある。

1日の諸儀礼の最後に、老シャマンが守護霊の依代となり、家の主人に色々と助言を与えている。老シャマンが手にしているものはタバコである。

この家の仏壇で、祭主の祖父母が祭っていた菩薩を3年前から約40年ぶりに取り出して祭っている。

考察

エルー・ズゥルトに託す願い

テンゲル・タヒホ儀礼は供犠動物を前提条件として成り立っている。今回の供犠動物は山羊である。儀礼において、一番大事なことはエルー・ズゥルトで、そこに託されている祈りである。

胸肉と心臓をもって祖先を供養することについて老シャマンに尋ねたところ、エルー・ズゥルトについて説明してくれた。「胸肉はもてなしや祭祀に最も重視されてきた。最高級の肉である胸肉と心臓をもってテンゲルや祖先を供養するのは当然なことである。胸肉と心臓は生命があることを証明する最も肝要な臓器で、上は頭、下が胴体へと繋がっている。祖先、自分、子孫へと代々繋がり、子孫代々伝え、代々孫が増え、子孫代々繁栄していくことを祈っている。食道、胸肉、肺臓、心臓は体の各部位と繋がっているので、テンゲルにも祖先にもこの家の男女老少を代々加護してくださいと願をかけている。生活において子孫代々豊かに暮らせるようにと祈っている。現在の生活においてだけではなく、子孫後代のことをも考えて祈っている」と語った。この説明から、今回の儀礼で、つながったまま一纏まりとして取り出され最高級の捧げ物と考えられているエルー・ズゥルトは代々子孫が増え、常に後代へと繋がり、繁栄し、豊かになれるようにという願望が託されていることが明らかになった。

当日の夜、同じ神棚に屋敷神と水神に他の捧げ物を供える。そのため、祖先に供えている胸肉と心臓を午後3時、或いは夜、庭に持って行き祖先のために燃やしあげてもよい。もし燃やしてあげるならば午後3時は一番良い時間だという。また、燃やしてあげなくてもよいと老シャマンが指示を出す。

それに祖先の聖なる力が入っているので食べてもよい、それは家族の考え次第だという。この家では、夜の鎮守祭が始まるまでそのまま供えて置いていたが、燃やさなかった。同日にテンゲル・タヒホ儀礼を行った他の一家の場合、シャマンに言われたように、午後３時に祖先のために燃やしてあげた。

翌日に、病気の全癒を願い、テンゲル・タヒホ儀礼を主催した家に司会者を務めた若いシャマンを訪ね、エルー・ズゥルトのもつ意味を尋ねた。「患者は病気にかかって困っている。そして快癒することを願っている。つまり、病気という非常状態から健康という正常状態に戻りたがっている。健康という「丸の状態」に戻りたい。エルー・ズゥルトは繋がったままの状態のひとまとまりである。それは一つの「丸の存在」である。もし、供犠動物の顎、食道、心臓、肺臓をばらばらにして取り出すと、それはひとまとまりではない、もちろん丸ではない。物事の丸を求めているのに丸を壊すのはいけない。」と語った。この話から見ると、エルー・ズゥルトは、物事の円満さ、いわば「全」の象徴である。

前述したように、テンゲル・タヒホ儀礼において、シャマンは供犠動物の各器官を順次１つ１つ丁寧にテンゲルに報告している。どこかを落とすと、丸ごとの叙すではなくなる。それによって願っていることも願いどおりに真丸になれなく、どこかが欠けると強く信じている。たとえば、病気の全癒ができないとか、子孫代々続けていく上で、どの代に何かの問題（不幸とか、子孫が絶える）が生じるとかといったことが生じると懸念されている。

テンゲル・タヒホ儀礼全体を通してみると、テンゲル、祖先と人の関係を潤滑にさせているのは、供犠された動物が主役で、水神、鎮守祭祀の場合は乳製品が主役である。もちろん酒、線香、みあかし及び祈祷文は何れの祭祀にも欠かせない。テンゲル・タヒホと言う名称のもとで行われた、テンゲル・タヒホ儀礼をはじめ、祖先祭祀、水神祭、鎮守祭、そしてシャマンの守護霊や補助霊への祭祀は、所謂モンゴル人が信仰してきた超自然の神々を最高レベルでもてなしして喜ばせることを通して、これらの神々の完璧な加護を求めている。儀礼は、準備の時間、清めの時間、報告・供犠の時間、祈りの時間、恩恵を受ける時間、供養の時間、饗食の時間、祭祀の時間、助言を受ける時間と言う風に進められる。

それは、人や家畜が増え、農産物を収穫し、子孫代々豊かで無病健康に暮らせることを祈っている。また、願いごとが丸のままとなって丸ごと「全」として実現すること、つまり、物事の完璧さを願っている。更にその祈願は時間的に過去、現在、未来へと繋がり、家族の連続性、豊かさの連続性が託されている。

シャマンはテンゲル・タヒホと言う名称の下で行われた一連の儀礼の中で、神憑りになることなく祭司者としての役割を果たす。そして、儀礼の最後に、守護霊を招き寄せて神憑りになり、この家のため色々と助言を与え、助言者の役割を果たす。

主な参考文献

〈和文〉

ウノ・ハルヴァ（田中克彦訳）

1971　『シャマニズム―アルタイ系諸民族の世界像―』三省堂

エドマンド・リーチ（青木保　宮坂敬造訳）

1981　『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店

荻原眞子

2002　「「シベリアにおける狩猟儀礼と動物供犠」序論」（小長谷有紀編）『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店

小長谷有紀

1991　「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」『東北アジア歴史と社会』名古屋大学出版会

2002　『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店

バンザロフ、ウエー・エム・ミハイロフスキー（白鳥庫吉、高橋勝之訳）

1974　『シャマニズムの研究』新時代社

マルコ・ポーロ（愛宕松男訳）

2000　『東方見聞録』平凡社

柳川啓一

1987　『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房

〈モンゴル文〉

納・賽西雅拉図主編

1992　『蒙古民俗研究』内モンゴル文化出版社

尼瑪

1999　『霊魂・偶像・信仰』中国・北京・民族出版社

泰斉古泰・満倉

1990　『蒙古薩満教』内モンゴル人民出版社

賀・宝音巴図

1985　『蒙古薩満教事略』内モンゴル文化出版社

呼日楽沙・薩茹拉

2003　『蒙古文化研究双書風俗』（上）内モンゴル教育出版社

呼日樂巴特爾・烏仁其木格

1988　『科爾沁風俗誌』内モンゴル人民出版社

呼日勒沙編集
2003　『科爾沁[1]民俗文化研究』内モンゴル教育出版社
呼日楽沙・白翠英・那琴・宝音朝古拉
1998　『科爾沁薩満教研究』中国・北京・民族出版社
胡日楽巴特・烏吉木
1992　『薩満教祭祀文化』内モンゴル・海拉爾・蒙古文化出版社
拉・胡日査巴特爾
1992　『哈騰根十三家神祭祀』内モンゴル文化出版社
色音
1996　『蒙古民俗学』中国・北京・民族出版社
羅朴桑殼丹
1981　『蒙古風俗監』内蒙古人民出版社
〈中国語〉
石光偉、劉厚生編著
1992　『満族薩満跳神研究』吉林文史出版社
黄強、色音
2002　『薩満教図説』中国・北京・民族出版社
趙展
1993、1997『満族文化与宗教研究』遼寧民族出版社

（さらんごわ・千葉大学社会科学文化研究科）

[1] 科爾沁とはホルチン地方のホルチンの中国語での書き方。

A study of the tengger tahiho (Festival) in horqin province the Inner Mongolia
-The wish entrusted on "Eruu zurtu"

SARANGOWA

Summary:

In August 2005 (July in the old lunar calendar) the author researched the rituals for the "Tengger Tahiho" festival which was presided by a Shaman, an "Ancestor" festival, a "Village Shrine" festival, and the "God of Water" festival in the inner Mongolian province of Horquin; her native land.

As it is widely known, from the 16th century to the 18th century, Mongolians where converted to Tibetan Buddhism and became Buddhist. However they still follower the shamanism that had remained deeply rooted in their mentality. The "Tengger Tahiho" ritual, popular in recent years, is a symbol of such continuing beliefs.

The most important features of the "Tengger Tahiho" and "The ancestor" festivals consist of animal sacrifices. In particular, the head, gullet, heart, and lungs are considered of great importance in the "Eruu Zurtu, and are taken out as a whole. In former researches, and though her survey, the author became confident in thinking that the meaning of the "Eruu Zurtu" was generally thought to be a prayer for the revival of the slaughtered animal. However, it is also though that the "Eruu Zurtu" was also conducted as a symbol to desire prosperity and affluent lives to future generations, as a prayer against disasters and illnesses, and for the safety and peace of the family. The research shows that keeping the various parts of the sacrificed animal connected symbolizes the connection of the present to the future on a time scale.